

かつて、なにわにこんな中医学があった
—中島随象の遺産—

伊藤良と中医学

Chinese Medicine in Naniwa from 1970's to present days.
—Inherited Genes from Zuisho Nakajima—

Relationship between Dr. Ryo Ito and the Traditional
Chinese Medical Science

河田 佳代子
Kayoko Kawada

一般財団法人 大阪漢方医学振興財団, 大阪, 〒 542-0083 大阪市中央区東心斎橋 1-2-17
TRADITIONAL CHINESE MEDICAL FOUNDATION OF OSAKA,
1-2-17 Higashi-shinnsaibashi Chuo-ku Osaka-city, Osaka, 542-0083, Japan

抄録

伊藤良先生は1923年、中国大連生まれ。1944年、国立新京医科大学医学部卒業。1961年頃、『医事新報』で大塚敬節先生の記事から漢方に興味をもち独学で勉強。中島随象先生に師事。「虚実」の重要性を認識するも一貫堂処方からでは真髄を知るには難しく、より深い理解を求めようになり伝統的中医学に傾倒。

1973年頃、神戸大学医学部で針麻酔に興味をもつ森雄材先生と出会う。上海中医学院編『中医学基礎』の読み合わせを始め、基礎から四診・弁証論治まで一貫した理論で統一された内容に重要性を感じ翻訳、1977年に出版したのをきっかけに「神戸中医学研究会」として活動を開始。その後、じつに20冊にも及ぶ翻訳出版を手がける。

一方では老中医を招き、「肝気虚と脾気虚 気虚の主体は何か」など、基礎理論を徹底的に見直すと同時に臨床と対比すること、『内経』、李東垣、張景岳、張錫純、鄭欽安などを読み込み現代の病状に応用することなど、これらの理論の理解と臨床の融合が伊藤先生の中医学世界観を築き上げ、真摯に患者に向き合う姿勢と相まって、見事な脈診・理論展開へと発展させていかれた。特に陰陽・虚実の判断は奥深く非常に重要に捉えておられ、年齢とともに人体における生命の根源である陽気のありかたと変化を、李東垣や張景岳、鄭欽安などからとりわけ熱心に学ばれ次々と臨床に応用された。

キーワード：中島随象、伊藤良、中医学

Abstract

Dr. Ryo Ito was born in Dàlián, China in 1923. In 1943, he has graduated Faculty of Medicine, the National Xīnjīng Medical University.

Circa 1960, he read an article written by Dr. Keisetu Otuka in Yi shi xin bao, became interested in Chinese medicine, and studied by himself. He studied under Dr. Zuisho Nakajima, but though realizing the importance of “xūshí”, it was difficult to understand the quintessence from the yīguāntāng prescription method. To obtain an in-depth understanding, he committed to Traditional Chinese Medicine.

In about 1973, he met Dr. Yuzai Mori. Together they translated Zhōng yī xué jī chū edited by Shānghāi College of Traditional Chinese Medicine. The book was published in 1977, which was the start of Kobe Society for the Study of Traditional Chinese Medicine. Since then, the number of published translations ranges up to 20.

In the meantime, he invited veteran doctors of Traditional Chinese Medicine, and reviewed basic logics, compared them with clinical diagnosis, studied Nèi jīn, and books written by Lǐ Dōng Yuán, Zhāng Jǐng Yuè, Zhāng Xī Chún, and Zhèng Qīn ān, put them in practical use for medical cases. His deep understanding of these theories and using them in clinical practice, built up Dr. Ito's vision of the Traditional Chinese Medicine, which evolved into impressive mǎi zhēn and a theoretical development, by facing the patients sincerely. Dr. Ito considers the judgement of yīn yang and xū shí profound and important, describes the state of yáng qì, which is the basis of life in human body, but changes relating to aging, as various types of huǒ, continuously practiced clinically, what he has studied from Lǐ Dōng Yuán, Zhāng Jǐng Yuè and Zhèng Qīn ān.

Key word : Dr. Zuisho Nakajima, Dr. Ryo Ito, Traditional Chinese Medical Science

伊藤良先生は現在 92 歳で、一般財団法人大阪漢方医学振興財団の名誉会長として漢方医学に貢献してくださっています（写真 1）。

伊藤良先生は、中島随象先生に師事された後、森雄材先生との出会いから神戸中医学研究会を発足。研究会の諸先生方と伝統的中医学を考究され、20 冊にも及ぶ中医学に関する書物を訳し中医学の継承に尽力くださいました。

■ 中島随象先生との出会い・中医学との出会い

伊藤良先生は 1923 年生まれ。

1944 年、国立新京医科大学を卒業。

1950 年、市内診療所に勤務（のち神戸医療生活協同組合附属病院）。その後、院長を務める。

1955 年頃より個人的に漢方医学に興味をもち始める。

1961 年頃、『医事新報』に掲載された大塚敬節先生の小青竜湯に関する論文を目にし、独学で漢方の勉強を始める。

1962 年頃、中島随象先生を紹介され師事。毎週ご自宅へ通い、教えを請う。

1964 年頃より中島先生に神戸医療生活協同組合附属病院に週 1 回来ていただき、実際の臨床現場での勉強を継続。1972 年の開業まで続けられた。



写真1 伊藤良先生 75歳当時

■ 中島随象先生のエピソード

随象先生のお話をしてくださるときは「こういうことがあったのだ」と、突然思い出したように語られる……。やはり、そこに随象先生の術に魅了されているご自身もあり、違ったかたちでご自身の研究を積み重ねてこられたことがうかがえました。

生命との駆け引きを独自の感性と一貫堂処方を武器に真剣勝負しておられたような随象先生。いくつか印象に残るエピソードがありました。

エピソード1：随象先生の義理のお姉さんの子宮がん

某国立大学病院で子宮がんと診断され、遺書を書いておけと言われた義姉に通導散加桃仁・牡丹皮を処方。しばらく服用の後、「すごい出血するからもうこのお薬飲むのは嫌。」と言われ服薬を中止。しかし、その後、脳卒中で他界された後の剖検で子宮がんがなくなっていたことを確認したとのこと。駆瘀血によりがんが消失したか。

エピソード2：随象先生のけが

随象先生ご自身が自転車で事故にあい肋骨が肺に刺さる大けがのときに、病院に搬送されたものの、病院の医師たちは重病の方に手を取られており、しばらく放置されたが我慢できずに病院を抜け出し自宅に戻られて、ご自身で通導散加減に大量の大黄を加えて治療された。そのときにはもう身動きがとれずに、布団をまるめて支えにして垂れ流し・寝たきりの状態が数日続いたらしいが、そういうことをされてようやく1週間目ぐらいに着物を剥いてもらっても大丈夫なぐらい動けるようになった。

エピソード3：血尿・蛋白尿

血尿だけではなくて糖尿や蛋白尿も血清成分だから出血と同じなのだということで、竜胆瀉肝湯加沢瀉加猪苓などを使うとよいと処方されていた。

エピソード4：かぜの回復期

老人がかぜをこじらせたときに、補中益気湯などで補気していたところ、「がんばって食事をするように」と周りから勧められ、本人も「頑張っ」て食事をしていて、よけいに苦しくなった。未だ正気回復が不十分なときにかえって邪を作っているようなものだと通導散で改善させた。

エピソード5：伊藤先生の肩痛（1995年、鄧鉄涛広州中医薬大学終身教授国際学会への寄稿文より抜粋）

「三十九歳の頃、健康と思っていた身体に一生の持病と識られる疾病が発生。喘促、便秘、ある日突然目醒めると右肩の痛みから拇指、示指に走るシビレ、異常に強い肩凝り、皮膚掻痒。頸を吊って伸ばしてみたり、宝塚に通って温泉に浸かったり、葛根湯を服用したり、整形外科の治療を受けたがいずれも全く無効。中島随象翁に治療を請い、“痰を化し瘀血を祛り、熄風して中を補す”と、古方一辺倒のその頃、お経でも聞くような診断の下、竜胆瀉肝湯・防風通聖散・通導散の合方に半夏、細辛を加えた処方戴いた。服用すると1日7～8回の大量の下痢が始まり、排便毎に腹中爽快を覚え、大便が2～3行になると、さしも頑固な症状は一掃された。以後、漢方医学に没入し、これにあきたらず、中医学にすすむことになった。当時を振り返ると、舌紅絳、苔黄濁厚膩起刺、脈滑数、老師の診断の如く“湿濁壅滯、昇降失司”と今にして思い知らされた。以後恙なく今日まで過ごすことが出来、亡き老師に感謝する毎日であった。」

随象先生からは特に虚実の弁証の重要性を学んだとおっしゃっていました。

膩苔の見方として、虚実の重要性。「白厚苔の場合は湿実である、ここでしっかり瀉さなければいかんということを勉強した。舌が紅で膩苔があった場合は、湿が熱を覆い隠している満布という状態である。」

「熱は火の残り、火は熱の極み」「防風通聖散は発表して表を破らず、下して裏を破らず」など、ときおり思い出したように随象先生の言葉をつぶやいておられました。

「仲景の方法を用い、方剂・処方はいわず……（難波抱節の言葉）。随象先生から戴かれた掛け軸にある言葉です。仲景（『傷寒論』）の方法を用い、方剂・処方はそのまま用いるのみでなく、その意は学ぶということで、伊藤先生もこの書については深く感銘を受けられ、常に1人ひとりの弁証を重要と考えておられました。

■ 神戸中医学研究会発足

1971年、上海第11人民医院の『高血圧病の中医理論と治療』を入手。本格的に中医学に興味をもつようになる。

1972年開業。翌1973年、森雄材先生をはじめとする神戸大学で針麻酔の研究をする先生方との出会いから、ともに中医学の勉強を開始。森先生と台湾に中医学の教本を買い付けに行き、上海中医学院編『中医学基礎』の読み合わせを始め、基礎から四診・弁証論治まで一貫した理論で統一された内容に「目から鱗が落ちる思いだった。これなら納得いくように学べる。」と一気に翻訳。1977年に出版



図1 1977年『中医学基礎』上海中医学院編訳 出版への揮毫

した(図1)のをきっかけに「神戸中医学研究会」として活動を開始。その後、じつに20冊にも及ぶ翻訳出版を手がけられました(表1, 2)。

私の存じ上げている晩年は、中医学の基礎・真髓を最重要に考えながら張景岳、李東垣、張錫純、鄭欽安などを、その先人がたどったようにまず受け取り、熟考されたのち現代の臨床に応用されていました。それぞれが抱く人体の陽気の変遷に生命の火の真髓を見いだそうとされていたように思います。

■ 老中医との交流

神戸中医学研究会を発足後、陸幹甫先生、楊育周先生、張鏡人先生、柯雪帆先生、靳士英先生、蘆崇漢先生などさまざまな老中医を招かれ、現実に行われている中医学の臨床や老中医の弁証や技を積極的に学ばれました。ただ単に教えを請うようなかたちではなく、研究会の先生方が伝統的な中医学に真摯に向き合われ探求を重ねたうえで、常に深い理論展開を追求されていました。

1985年、中国四川で行われた研究会において、伊藤先生が『脾陰虚の初歩的認識と臨床経験』を発表。本場四川の中医師も驚くほどの内容であったため、中醫師たちも本気で討論を展開するようになり、伊藤先生をはじめ研究会の先生方も西洋医学を捨て、より中医学に傾倒するきっかけになったようです(「虚・実」「臟腑弁証」などの基本的理解から臨床検討に及ぶまでさまざまな内容が当時の『THE KANPO』に掲載されている)。

■ 伊藤良先生の中医学へのこだわり(表3, 4)

・ 脈診

特に脈診については『医灯續焰』を手元に置いておられました。自ら臨床を大切にするなかで深く学びとられたように感じ入ります。脈診についてお聞きしたところ、「とにかく分からなくても脈を診ること。弁証、処方した結果は患者が教えてくれる。」と厳しいお言葉を賜りました。ただ、これはもうまさにコンピュータにたとえると、ソフトをどんどん入れ込んでいかれているというもので

神戸中医研究会の業績 1

- ・ 中医学基礎(訳) 1977年
- ・ 漢薬の臨床応用(訳編) 1979年
- ・ 中医学入門(編著) 1981年
- ・ 中医学処方解説(山本巖・伊藤良監修)(編著)1982年
- ・ 中医臨床講座(1~3) 1982年1983年1986年
- ・ 症状による中医診断と治療(上・下)1987年
- ・ 中医臨床のための常用漢薬ハンドブック(編著)1987年
- ・ 中医臨床備要(訳編)1989年
- ・ 金匱要略浅述(訳編)1989年
- ・ 中医臨床のための舌診と脈診(編著)1989年

表 1

神戸中医研究会の業績 2

- ・ 中医臨床のための病機と治法(訳編)1991年
- ・ 中医臨床のための中薬学(編著)1992年
- ・ 中医臨床のための方剂学(編著)1992年
- ・ 中医臨床のための温病学(編著)1993年
- ・ 常用中医処方集 1993年
- ・ 基礎中医学 1995年
- ・ 中医臨床のための温病条弁解説(編著)1998年
- ・ 医学衷中参西録を読む(訳) 2001年

表 2

伊藤先生のこだわりと変遷

- ・ 脈診 医灯續焰
- ・ 基礎の徹底研究 『内経』の読み直し
- ・ 肝気虚と脾気虚 (肝陰と脾陰)肝体陰用陽(葉天士)
- ・ 中薬の配伍運用 特に昇降浮沈・虚実補瀉
- ・ 昇降浮沈 昇陽瀉火・・・李東垣
昇陽散火・・・李東垣 内傷発熱
張景岳 外感鬱熱生火
昇水降火・・・水火未濟
引火帰原・・・戴陽(虚陽不斂) 張景岳
格陽(裏寒格陽)

表 3

伊藤先生のこだわりと変遷

- ・ 楊育周 『傷寒六経病変』“火”
- ・ 張景岳 『景岳全書』寒熱真假篇 論虚火
四逆湯加葱白(白通湯)、鎮陰煎
- ・ 李東垣 『脾胃“陰陽昇降”の枢紐』
補中益気湯、昇陽益気湯、
昇陽散火湯、補脾胃瀉陰火昇陽湯
- ・ 張錫純 中薬使用における中医の配伍意味
と脈からみる病証との対比
舒和湯、十全育真湯など
- ・ 鄭欽安 『医理真伝』『医法圓通』
陰気上僭 易経からみる陰陽 潜陽丹、封髓丹など
- ・ 張仲景 『傷寒論』

真火のこだわり

表 4

あって、それを横から見てわかるものでもありませんが、臨床と中医学への飽くなき探求心で常に up date を繰り返しておられます。

・ 基本に忠実に真髄を観る

基本を重要視する先生のこだわり、基本に忠実であるという姿勢が常に見えます。そのなかでも特に当初、よくみられたのは肝・脾の病態：肝気虚・肝陰虚、脾気虚・脾陰虚を一時かなり深く追求されてきました¹⁾。「肝体陰用陽」(肝は陰を体とし、陽を用とする)。肝は陰液が基礎(体)になったうえで陽気が機能するので、陰液の不足は陽気の疏泄に影響を与え、また陽気の有余や不足は「疏泄」の失調を通じて次第に陰液に影響を及ぼす。肝の病態においては陰液の調整が必須であることを示しており、さらに脾の運化が肝陰を補充し、脾の運化は肝陽によって補償される。外見的に現れやすい肝の陽気有余が把握されやすいが、その裏にある肝脾の関係を明らかにすることで治療効果をあげておられました。しかしその後、先生ご自身も年齢を重ねられ、生命維持の根源である腎陽(真陽)・真火について熱心に取り組まれ、鄭欽安の『医理真伝』を再読されながら『易経』に始まる中国哲学の奥義を探求し、生体の理解を深めておられます。

・中薬の配伍運用

中薬の配伍運用にもかなりのこだわりがあったように思います。特に昇降浮沈については事細かに、李東垣、張景岳などを読み込まれて臨床応用されておりました。晩年に神戸中医学研究会で訳された張錫純の『医学衷中参西録』は脈の意味するところは何であるかということと、方剤の構成の関係が記されているとても興味深い書物であると、よく参考にされていました。

・真火へのこだわり

以前、楊周先生の『傷寒六経病変』を読んでおられ、ここにある古典から引用されさらに熟考された「火」の概念を重要に捉えておられました。張景岳の虚火、李東垣の陰火、それから張錫純のなかに出てくるいろいろな中薬使用・配伍運用・脈状など、また鄭欽安の火神派的意義……こういうものをすべて考えますと、最後に真火へのこだわりが見えてまいります。ご自身がお歳をとられ、陽虚というものに対する概念が徐々に深まっていくのは横から見ていてとてもよくわかるころでした。「冷えというのはこういうものなんだなあ」というつぶやきとともに…「桂皮末をウォッカなどでチビッと舐めるんや。そうするとうまく温まる。たくさん飲んではいかん、外へ発散するから」と。そういうことをポロッとおっしゃっておりました。

■ 症例 1 55歳 女性

主訴：尿道痒痛

現病歴：痔の手術後の尿道渋痛，膀胱炎治療無効。

現症：顔面艶なく淡黄色，尿道痛は痒刺痛。

排尿時には痛み消失。小便 10～15 行／日，夜間 1～2 行。

下肢冷え，腰膝酸軟。

少腹逐瘀湯，決津煎，六味丸加減など投与するも，軽快はあるが全治にはいたらない。

舌診：淡紅不胖，苔白底汨黄。

脈証：左 沈弦細，関独弦微浮而硬。

右 弦微浮，按無力。

腹診：右少腹圧痛

弁証：肝虚夾風証

処方：黄耆 18g，山茱萸 15g，地黄 15g，竜骨 15g，牡蛎 15g，芍薬 12g，桂枝尖 9g，山薬 15g，甘草 4.5g，杜仲 12g，枸杞子 12g，党参 9g，桑葉 3g

7 剤で治癒

考察：参考 1 『医学衷中参西録』²⁾

風気は肝に通ず。

左脈硬は肝脈夾風の象，右脈浮無力は病状が長引き気血虚弱の象。

参考 2 柯雪帆主篇『中医弁証学』

風邪弁証：風は楊邪にして六淫の首に居す，「風は百病の始まり」と言われる。……よく行り，しばしば変ざるを以て，脈腠経脈を直透し，めぐ

りて臓腑に及ぶ。風気は肝に通じ、肝経には直入することも可なり。

方解：『本経』黄耆主大風

桂枝 遂風の要薬。黄耆・桂枝で遂風力を高める。

竜骨・牡蛎 収斂剤。正気は収斂しても邪気は収斂せず。

腎の蟄蔵を助けるが肝風の消散は妨害しない。

山薬 下焦の気化固摂。

地黄・芍薬 黄耆・桂枝の熱を調済，補血。地黄は補腎，芍薬は平肝に働く。

甘草 肝急を緩める。

■ 症例 2 31 歳 男性

主訴：てんかん

初診：約 10 年前

既往歴：特記すべき事項なし

現病歴：小児期より数カ月ごとにてんかん発作が起こる。前触れなく急に意識を失う。

補中益気湯加減，加味帰脾湯加減，蘇子降気湯など処方するも著効なし。

脈診：双脈，偏沈，弦細，按無力。

舌診：胖大，淡紅，白苔厚，齒痕（+）。

弁証：寒痰証

治法：行水化痰，回陽降逆。

処方：姜附茯苓半湯合附子理中湯（白朮 12g，茯苓 24g，半夏 21g，生姜 6g，炙甘草 9g，天南星 9g，縮砂 12g，炮附子 9g，党参 12g，鮮生姜汁 30ml）

経過：7～8 カ月ごとに発作（+）。口内炎，清涕（+）。炮附子 30g に変更。

炮附子 30g に増量以降は発作減少。しかし，1 回／年発作あり。

姜附茯苓半湯加柏子仁・茯神に変更（炮附子 60g，半夏 26g，茯苓 15g，茯神 15g，柏子仁 6g，鮮生姜汁 60ml）。

以降約 3 年間発作なし。

考察：症例は小児期からの発病でやや抑うつ傾向もみられる。当初から痰邪による清道の閉塞と弁証はしていたが，通常の温化寒痰や温中補気などでは明らかな効果は得られなかった。鄭欽安の姜附茯苓半湯で炮附子 60g，辛散し寒の壅滞を散ずる生姜汁を 60ml 使うことにより著効を得た。『医理真伝』において昏迷・卒倒に到るものを中痰³⁾としており，中痰の生じる原因は陽虚陰盛による元陽不固不運であるとしている。陽虚のため外風も感受しやすくさらに脾陽を損傷する。未だに患者の舌苔は部分的に比較的厚いが，長年の寒痰（中痰）を化し，清道の壅滞を宣通するための扶陽の重要性を実感できた症例である。

■ 最後に

年齢とともに深く命門の火，『易経』でいえば龍火をみられるようになり

ました。火神派から影響を受けられた『易経』の龍のごとく、見龍・躍龍・飛龍・亢龍と表されるように神戸中医学研究会の先生方と見識を深められ、世に示されたと思います。いま、恵みの雨として数々の書籍を残してくださったと私はあらためて思います。「薬は険峻を貴ばず」と常に言われておりました。中島随象先生に、または中医学に魅了され勢力の衰えることなく研鑽をつまれておられますが、やはり真髄をみて効かず漢方というものを常に目指しておられたと理解しております。

文献

- 1) THE KANPO, Vol. 4 No. 3, 1986.5
- 2) 神戸中医学研究会訳篇：医学衷中参西録を読む。医歯薬出版，2001年
- 3) 鄭欽安著：中医火神派三書《医理真伝》《医法圓通》《傷寒恒論》。学苑出版社，2007年